「靴を履かせる看護」

受賞者：若杉 英典 さん

じん肺の末期で入院していた90歳の男性。呼吸困難が進行し、酸素投与が欠かせない状態で、言葉も少なかった。夜勤で初めて受け持った夜、彼はかすれた声で言った。

「死ぬ前に、もう一回、靴を履きたいんや」

突然の願いに戸惑いながらも、ご家族に話を聞くと、彼は長年建設現場で働いてきた職人だったという。毎朝、作業靴を履き、誰よりも早く現場に立つのが誇りだった。「病人ではなく、職人として最期を迎えたい」そう語るような眼差しを彼はしていた。

病状は進行しており、起き上がるのも困難。医師からは「無理をさせないように」と指示があったが、私は悩んだ。このままベッド上で最期を迎えるより、〝らしい姿〟で旅立てる方法があるのではないかと。

私は医師に相談し、多職種と連携しながら慎重に準備を進めた。酸素ボンベを用意し、看護師2人で身体を支え、ゆっくりと車椅子に移乗。ご家族が持ってきてくれた古びた作業靴を手に取った。

「よし、履くか」

彼は小さな声でそう言い、自分の足を動かした。足が靴に収まった瞬間、彼の背筋がピンと伸びた。まるで、現場へ向かう朝のようだった。

数日後、彼は家族に見まもられながら静かに息を引き取った。

後日、ご家族が病棟を訪れ、私にこう言った。

「父の〝らしい姿〟を見せてくれてありがとう。あの靴を履いた姿は、父の人生そのものでした」

いのちを長らえるだけが看護ではない。〝その人らしく生きる〟ことを支えるのも看護の力。あの日の靴は、彼の人生と誇りをもう一度取り戻すための一足だった。

そしてそれは、私にとっても忘れられない〝看護師としての原点〟となった。